

岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

107
SUMMER
2026

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



市制一一〇周年・開館三〇周年記念コレクション展

「窓—そこに介在するもの」

安本 翔音・田中裕紀乃

前期：七月四日(土)～八月二日(日) 後期：八月八日(土)～九月十三日(日)

一九九六年七月六日に開館した当館は今年で開館三〇周年を迎えます。約二年間にわたる改修工事を経て、再び皆さまをお迎えできることを心よりうれしく思います。気持ちも新たに開館いたしますので、これからも皆さまの日常に彩りを添えられるような存在であり続けられれば幸いです。

再オープンを飾る記念すべき最初の展覧会は、「窓—そこに介在するもの」と題し、当館が誇るコレクションを中心に紹介するものです。窓は内と外をつなぐ接点／隔たりであり、それは光・風・音・香・景色といった様々な情報を切り取って私たちに提供してくれます。美術館・博物館は歴史や芸術の窓です。展覧会を通じて、様々な新しい概念や知識を学ぶことができます。本展覧会は、窓と共通する美術館・博物館の役割に注目して、当館・岡崎のコレクションを紹介するものとなっています。

本稿では、展覧会の魅力を少しでもお伝えできるよう、紙面の許す限り本展の見どころをご紹介します。

みどころその①

やつとお披露目！初公開の品々

近年当館に収蔵されてやつと蔵出しすることになった、当館の今後の目玉となりうる作品をここでは紹介いたします。また、せっかくアルカディアにまで、目を通してくれた方々のために、事前調査時の写真など、普段見られない写真をちよつとだけお見せします。

太刀 銘有綱／（銀象嵌）伴清定石塔切 大北氏時定所持（当館蔵・前期展示）



平安時代末期から鎌倉時代初期に作刀された太刀です。澄肌、佩裏銘（本来と

は反対側に銘を切る）などの特徴から、東京藝術大学名誉教授の原田一敏氏によれば、古青江の有綱の作ではないかとされています。古青江とは備中国（岡山県）青江で活躍した刀工集団で、後鳥羽上皇の御番鍛冶も務めた名匠が揃います。本作は岡崎藩本多家に仕えた藩士の家に伝来したもので、京都で化けて出た妖怪をこの太刀で切ったところ、傷跡のついた石塔があらわれたという伝承が残っていることから「石塔切」といわれています。平成二八年度にご寄贈いただき、当館のコレクションのひとつとなりました。



記録写真—古風な小さな切先
うっすらと細く先の丸い帽子を見ることができます。



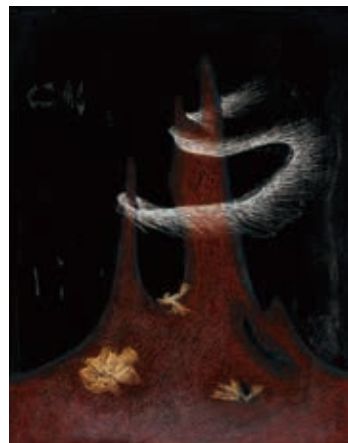
記録写真—ぱっかり開く筆筒
中の抽斗ひとつひとつのサイズを測っています。
正面からの様子は実物で！

花鳥蒔絵螺鈿書筆筒（当館蔵・後期展示）

今号の表紙となっている作品で令和元年度に購入いたしました。桃山時代から江戸時代前期（十六世紀後半から十七世紀頃）に日本で制作されたもので、ヨーロッパで人気を博し、お土産品として輸出されました。通称「南蛮漆器」と呼ばれる本作は、通常扉を閉めた状態で展示されますが、今回は扉を開いて中の抽斗が見えるように展示いたします。抽斗には額縁のような装飾が施されています。外側の装飾と内側の装飾の違いにご注目ください。気になる内側は：ぜひ、当館でご覧ください。

南蛮漆器は西欧の好みに合わせて、隙間なく装飾が施されており、日本に流通・伝来した漆芸品とは様相が異なります。日本で伝来した漆芸品と海外向けの漆芸品、その違いを見比べてみてください。

山田光春《無題》(当館蔵・前期展示)



額裏

本作は平成二七年度に当館に収蔵されました。なかなか公開の機会に恵まれませんでした。この度ようやくみなさまにお披露目いたします。

本作について当時の調査を確認すると、作品名と制作年は判明していない状況でした。本展出品のため、調査を進める中でこれまで不確かであった点が徐々に明らかになってきました。

本作は一九三〇年代に制作したと考えられるガラス絵で、額の裏面に、「自由美術、243」との記載が確認できます。この情報から、自由美術家協会が開催した展覧会に出品された可能性が高いと考えられます。光春は、一九三七年七月の第一回自由美術家協会展にガラス絵を含めた作品を六点出品していることが分かっていますが、その全容は十分に解明されていません。翌年以降の同展にも出品を続けていますが、ガラス絵の出品は第一回のみで、以後は油彩作品に専念していることが確認されています。確証には至りませんが、本作も第一回展に出品された可能性が高いと推察されます。もし本作が第一回展出品作品であるとすれば、作品タイトルや制作年をさらに絞り込む手がかりとなるでしょう。本展を契機に、今後も調査を継続し、より詳細な情報の解明を進めてまいりたいと考えております。タイトルが特定されるとすれば、どのようなタイトルになり得るのか、ぜひ想像を巡らせながら本作をご覧いただき、本展をお楽しみいただけましたら幸いです。

みどころその②

修復後初公開の作品

当館に収蔵されている作品は、いずれも長い年月を経て今日まで受け継がれてきた、岡崎市の大切な財産です。これらの作品を大切に保管し次の一〇〇年、そしてさらに先の未来へ繋げていくため、日々作品を整理・点検を行っております。人間も不調を感じると医療機関へ出向くように、収蔵作品も状態に応じて専門家による適切な処置を受けながら、その姿を保っています。

本展では、修復を経て初めてみなさまにお披露目する資料を前期・後期あわせて五点ご紹介いたします。本稿ではそのうちの一点、《受胎告知》をご紹介します。本作は、スペインの画家の手によるもので、作者は明確には判明していません。皆さんが気になるのは、どこをどのように修復しているのか、という点かと思います。本作に施された主な処置は、絵の具の剥落止め、画面の洗浄、欠損部分に充填、充填部分に補彩、そして色価・光沢の調整です。油彩画は経年により表面に亀裂が生じ、キャンパスの上の絵具が浮き上がって剥落することがあります。そのため浮きあがった絵具を固定したり、長い年月で蓄積した塵埃を慎重に取り除いたりする必要があります。洗浄が修復に含まれることは意外に感じられるかもしれませんが、画面に負荷をかけないよう高度な知識と技術が求められる重要な工程です。

残念ながら修復前の写真をご覧いただくことはできませんが、修復を経て新たな時間を歩み始めた本作を、是非展覧会で直接鑑賞いただけますと幸いです。

本稿の執筆にあたり、名古屋美術館の森本陽香氏より貴重なご教示を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。



スペインの画家《受胎告知》17世紀、油彩・キャンパス、当館蔵

EVENT INFORMATION

ギャラリートーク

担当

当館学芸員

日時

- ①7月6日(月)
- ②7月12日(日)
- ③7月29日(水)
- ④8月26日(水)
- ⑤9月5日(土)
- 各日とも14時～

会場

当館1階展示室
(開始時刻までに展示室入口前にお集まりください)

参加費

無料
(ただし、当館の観覧チケットが必要)

その他にも多数イベント開催予定！
詳しくは当館ホームページをご確認ください。



而立のときを迎えて

本年七月、岡崎市美術館は、開館三十周年を迎える。その間、開催した展覧会は一七一回。記憶に残る展覧会も少なくない。来場者も一三〇万人を超える。これもひとえに岡崎市民、市当局各位のご支援とご理解の賜物と、心よりお礼申し上げる。その岡崎市美術館の学芸員と話し合う機会があった。開館前のことである。わたしも当時学芸員、話しは展覧会の出品依頼であったが、まずは「マインドスケープ・ミュージアム」なる聞き慣れない造語の説明に始まり、美術館の成り立ちに及んだ。未だ認知されてもいない新設館の出品交渉ならば、そんなものだろうが、担当学芸員の苦勞は、この一事を語るだけでも分かって貰えるだろう。むろんこうした苦勞は、開館後もしばらくあつたに違いない。いや、そもそも美術館のことを知って貰うのは、出品交渉のイロハ。別に開館前後に限るものではない。何よりこちらの企画展展覧会で、貴重な作品・資料の借用を申し出るのだから、丁寧な上にも丁寧な説明が必要だろう。

それに展覧会開催に向けての学芸員の仕事は、出品交渉だけではない。構成する作品（資料）リストの作成にはじまり、いま述べた出品交渉以外にも、借用、搬入（集荷）、陳列、撤収、搬出、返納など、作品に直接係わる作業に限っても、これだけあるのだ。そのいずれの段階でもミスは許されない。借りた資料は借りた時の状態で返して当然。扱いには細心の注意が求められる。大変である。

だが展覧会場ではどうだろう。会場に一步踏み入れれば、作品・資料が展覧会の主旨に基づき整然と並ぶ、チリ一つない祝祭的空間が広がる。そんな中では、展覧会を実現させた学芸員や、さらにそれを支えた管理部門の職員の仕事はつい忘れがちになるのも仕方ないかも知れない。だが、展覧会とは、期日になれば、いつの間にか開かれていくし、ましてや陳列替えなど誰かがやってくれる、安直にそう思われそうだが、そんなことがあるはずもない。

と、どこか繰り返してきいたが、思い至って欲しいのは、過去一七一回の展覧会すべてに、こうした学芸員たちの目に見えない仕事があった点だ。それも大過なく、である。もちろん苦勞ばかりでない。リスト作りの楽しさ、そのリストに挙げた作品の借用が許可され、搬入・陳列された時の嬉しさは何ものにも代え難い。作品熟覧ができるのも学芸員冥利そのもの。研究も深まるはずだ。

重要なのは、そうして展覧会の回を重ねるごとに岡崎市美術館の社会的認知度は上がり、信任を得ることができた点である。さらに、それで満足できるものではないにせよ、市内外に人脈つまりは情報のネットワークができたことも見逃し難い。これと、寄託品も含めた収蔵品、要するに自由に使える資料を持つことは、美術館・博物館活動の力の源泉だ。もとよりそれら二つの充実に果てはない。日々努めていくべきだろうが、一七一回の展覧会の開催とそれに費した三十年は、

特任館長 榊原 悟

曲りなりにも岡崎市美術館にそうした力を与えてくれたのではなかったか。それにしても三十年。人で云えば、まさに而立の歳。これまでの精進を基礎に、さらなる研鑽を積むことで自立を図る。そんな「而立」の語にあまり、わが岡崎市美術館もこれを期に一段の飛躍を目差したい。

ではどうすればいいのか。

もとより「マインドスケープ・ミュージアム」「家康とその時代」、この二つの金看板は下ろす必要はない。なお館運営の指針として顧みる価値があると思うからだ。では改めて、どうすればいいのか。

わたしは美術館の郷土資料館としての役割、機能をいま一度見直してみたら、と思っている。第一の提案である。とは云え、いつ行っても同じような資料が陳列されている、しかも時には複製さえ混っている、そんな型にはまった、古色蒼然たる？郷土資料の展示を想定しているわけではない。もっと柔軟な展示構成を考えている。その際、用いる資料こそは館の所蔵品、だけではない。寄託も含め、手元にあるすべてである。当然、それらは、郷土の歴史、文化を語るものであるか、当館運営のコンセプトに係わる資料であるはずだ。要するにそうした収蔵品の活用を図ること。第二の提案である。

問題は、限られた収蔵資料でどんな構成ストーリーを描けるか、である。どうしても必要な資料は、最小限借りてもいいではないか。しかし、そこに智恵を絞るのが、学芸の力ではないか。そう云えば、購入にせよ寄贈・寄託にせよ、資料の受入れに際しての説明文の末尾に「展示に活用できる」の一文を添えるではないか。ならば受入れた以上、活用してみろ、と云いたい。皮肉の山椒の辛味を利かせて、かく要望する。

それに先にも云ったではないか。三十年培った情報のネットワークと収蔵品は、当館の大きな力であると。しかし、それは実際に使えばこそ力になるのだ。収蔵品による企画展、それこそが、これからの岡崎市美術館の自立の力を測る試金石となるはずで、今回のリニューアル記念「窓」展が、それへの開かれた窓とならんことを切に願う。

加えてそうした展覧会を定期的に開くことは、長年の懸案である本館棟（常設展示室を含む）の建設にも係わる。そこで開かれることとなる常設展の試行にもつながるに違いない。斬新で企画性高い収蔵品展を切望する。それこそがこれから三十年、岡崎市美術館に課せられた命題だ。

而立のときを迎えて思うところを述べてみた。市民各位のさらなるご支援をお願いする。岡崎市美術館は、必ずそれに応える。むろん展覧会によってである。ご期待されんことを！

岡崎市が生まれた日

『岡崎朝報』にみる市制施行

山下 葵



『岡崎朝報』大正5年7月1日号

大正五年（一九一六）七月一日、岡崎市が誕生した。今年はそれから二〇年の節目である。愛知県内では、名古屋・豊橋市に次ぐ三番目、全国では六十七番目の市制施行であった。初代市長は最後の岡崎町長を務めた千賀又市。当時の人口は約二万五千人であった。市域は旧城下町エリアを中心とした旧岡崎町域であり、現在の岡崎市域と比べると限定的なエリアである。

岡崎町が市制施行に向けて本格的に動き出したのは明治四十三年（一九一〇）の末からで、約五年間の奮闘のすえ念願の市への昇格を果たした。今回紹介するのは、岡崎市が生まれたその日、大正五年七月一日の岡崎朝報という新聞である。岡崎朝報は明治四十四年に創刊。前身は明治三十三年六月に発刊された月三回刊行の『三河商工新聞』で、その後、日刊新聞『三河』へと発展した。『三河商工新聞』発刊時のメンバーの一人である岡田撫琴が『三河』の社長となるが、やがて衰退し、明治四十四年に竹内五郎が引き継いで『岡崎朝報』と改した。なお、先行紙である『新三河』とは長くライバル関係だったようである。

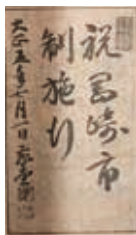
岡崎朝報は一号につき四面構成を基本とする。号によっては例外もあるものの、一面には評論や小説を載せ、下部には広告が目立つ。二面では国内と地域の政治に関する記事が中心となる。三面は所謂「三面記事」というもので、地域のニュース、例えば犯罪やゴシップなど（現在ならコンプレックス的に掲載できないようなものもある）が載る。四面はすべてで広告で埋められている。市制施行のこの日については通常の四面に加えて「第二」「第三」という紙面が組まれた。

一面の上部には「祝市制実施」の文字が躍る。その背景には、現在も使われている市章が輝く。この「祝市制実施」文字は翌日の二日号まで載る。

おそらく当時は七月一日から三日間祝賀イベントを実施したこともあり、三日号があれば同様の文字が付されたであろうが、三日は月曜日で休刊日であった。四日からは通常の仕様に戻る。一面上部には、「岡崎市設置」と題した社説が載る。市制実施後の岡崎市が目指すべき姿を力説している。教育・衛生・産業・交通土木を新たにすべきで、町時代の「弊風悪慣を一掃」すべきと主張する。また、岡崎町から議員が出ていないのは、選挙区の問題だけではなく、議員になりうるような人材がいなかったとも論じている。市の看板を掲げるからには「大覚悟大奮闘」の努力が必要であると説いている。なかなか厳しい。ただ市になったことを喜ぶだけではけしからんことだろう。

とはいえ、市全体は祝賀ムードに沸いていた。二面ではこの日から三日間、市制執行祝賀会を行うことを報じている。「本多家寄附金」という見出しもあり、本多忠勝家の子孫である本多子爵（忠敬）が市へ三百円を寄付したとのことを伝えている。市制施行を祝う忠敬の書も掲載されていた。

第二号の一面に並ぶ祝電も紹介しておきたい。先んじて市制施行した市の首長である、東京市長奥田義人、名古屋市長阪本鈺之助、大阪市長池上四郎、京都市長井上密の祝辞と、この後総理大臣を歴任する原敬や若槻礼次郎の祝辞も載る。また、愛知県知事松井茂に

本多忠敬の書
(7月1日号の2面)

『岡崎朝報』大正5年7月1日第二号に掲載された祝電・祝辞

* 参考文献『新編岡崎市史 近代』

* 『岡崎朝報』は西尾市岩瀬文庫所蔵、写真撮影は当館が行った。

絵画の見方―落款からみる制作年

美術館や博物館の展示には、作品の解説を書いたキャプションが置かれているのを、見たことがあるでしょうか？キャプションには、作品の見どころや歴史的背景から、制作年や制作年代、法量まで作品に関する基本的な情報が書かれています。さて、この制作年や制作年代、どうしてその年・その時代に描かれた作品だつてわかるの？と疑問に思ったことはないでしょうか。そんな疑問にお答えすべく、今回は制作年代をどのように推測しているのか、その一端をご紹介します。

制作年・制作年代を推測するにあたり、手掛かりのひとつとして用いられるのが、落款、というものです。落款とは、作品の締めくくりとして記す、作者自身の署名や印章のことを指します。

この落款による制作年の推測について、当館に所蔵されている、冷泉為恭の作品を例に挙げてお話ししましょう。

冷泉為恭は、幕末に活躍した復古やまと絵師です。文政六（一八二三）年、京都で狩野永泰の第三子として生まれました。当初は狩野派の絵を学んだものの、狩野派の画風は好みではなかったようで、独学でやまと絵を学びました。晩年は幕末の動乱に巻き込まれた結果、逃亡生活を余儀なくされ、元治元（一八六四）年、大和丹波市にて長州藩士の手によって非業の死を遂げました。

図1は『蛭子命図』。七福神の一柱で、「恵比寿」と呼ばれる神様を描いた作品です。

図1



この作品では、落款が「図書学生藤原為恭謹識」の「図書学生」という落款は、為恭が岡田家に養子に入る前、つまり、一八、九、二六、七歳くらいの頃に描かれた作品に使われている落款です。ここから、図1は天保一（一八四〇）〜嘉永二（一八四九）年頃に描かれた作品である、と推測できます。

図2

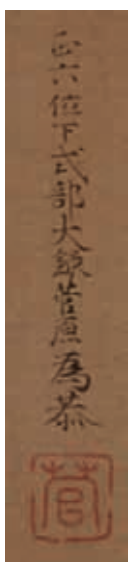


続いて、図3は「天保施米図」という天保の大飢饉の際に知恩院で行われた施米の様子を描いた絵巻物です。この作品の落款は、「正六位下式部大録菅原為恭」（図4）。藏人所岡田出羽守の養子となり、公家の仲間入りを果たした為恭は、以後落款に自らの官位を記すようになります。この作品では、落款に「正六位下式部大録」とあり、この官位の時に描いた作品である、と考えられるのです。為恭は嘉永三（一八五〇）年に正六位下式部大録となり、安政二（一八五五）年に式部少丞の官位を賜ります。つまり、

図3



図4



井原 凜

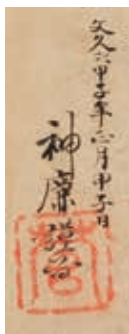
図3は嘉永三〜安政二年頃に描かれた作品、となります。

最後に、図5「大黒天図」を見てみましょう。この作品には、「神廉謹画」（図6）という落款が記されています。この「神廉」という号は、為恭が攘夷志士に追われ、潜伏生活を余儀なくされていた頃に使用していたものです。時期でいいますと、文久二（一八六二）年ごろ。この頃は、「神廉」の他に、南山陰士や山蔭、吉祥子、又真蓮などの号を用いていたことがわかっています。

図5



図6



このように、落款からある程度制作年を推測することが出来ます。ただ、実をいいますと、ここまで細かく推測することが出来るのはかなり稀。為恭は、落款から制作年を推測しやすい絵師であり、他の絵師だとかまで簡単に推測できません。とはいえ、途中で署名を変える絵師は割といます。有名どころですと、葛飾北斎でしょうか。そうした、落款を変更する絵師だと、何となく制作時期を絞ることが出来る、という訳です。

美術館や博物館で作品をご覧になる際は、ぜひ落款にも注目してみてください。もしかしたら、未だ誰も知らない発見があるかも…？

参考文献

逸木盛照『冷泉為恭の生涯』便利堂、一九五六年
岡崎市美術館『冷泉為恭展：幕末やまと絵夢花火』岡崎市美術館、二〇一一年



『館まわりの周辺散策ガイド』選

今泉 岳大

今回の本誌はリニューアル記念号ということで、昼休みに館のまわりをランニングしている今泉が、個人的に好きな屋外スポットをいくつか紹介したい。

① **恩賜池** 館の南側にある恩賜池は一周歩いて約十五分の散歩コースとなっている。当館のあらゆる企画展は観覧後に恩賜池を一周することと完結する、と言っているくらい文学的で丁度よい散歩コースなのでお勧め。個人的に、小学校の算数で習う「AさんとBさんが池の周りを逆方向に歩きだして出会うまでの時間」の問題でイメージされるに相応しい理想的な池だと思っている。

② **恩賜苑にある流水モニュメント** 水が流れるモニュメントだが、水が止まっているため、突起している部分を正しい順番で押してゆくと秘密の入口が表れるRPGの謎解き要素にしか見えない。

③ **陽だまりの小さな原っぱ** 恩賜苑と「中央総合公園バーベキュー場」を繋ぐ林道の途中にある窪みの美しいスペース。陽が差していて、奥に小さな川が流れている。ピクニックに最適で、特にマネの《草上の昼食》をやる時などにお勧め。因みに「中央総合公園バーベキュー場」にはほっこりした広場と遊具があるのでバーベキューをしなくても楽しめる。

④ **クレーター型モニュメント** エントランス前の広場にある「ミストサークル」と呼んでいる中谷芙二子による《霧の彫刻》である。実際は霧が噴霧する作品であるが、現在では子ども達が中を走る遊具として有効に活用されている。個人的に、漫画「AKIRA」でネオ東京のモニュメントになっている巨大クレーターのミニチュア模型として楽しく鑑賞している。

⑤ **2階屋上スペース** レストランとショップに面した広いスペース。無目的に広く無機質であるため、ひとりで踏み入ると少し不安になる時がある。南側からは市内の美合方面を見渡せ、天気の良い日は遠くに小さく海が見える。当館は市街から離れているため不便と言われることがある一方で、離れているからこそ、わざわざ行くことの意味と、礼拝的な価値を見出すことができる、のである。ここからの遠望は身体的にも精神的にも日常から少し離れたことを確認する「心の展望台」である。

来場者の皆様がそれぞれの楽しみ方を見つけてほしい。

6

NEW FACE



鈴木 明菜

今年度より新しく美術博物館の学芸員に着任いたしました、鈴木明菜と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

大学では仏教美術史を専攻し、鎌倉周辺の禅宗寺院における観音信仰について仏像を題材に研究しております。岡崎には素晴らしいお像が数多くありますので、これから実際にお参りさせていただくのを楽しみにしております。

生まれは茨城県で、大学時代は仙台で過ごしました。岡崎には就職をきっかけに初めて参りましたが、小さい頃に連続テレビ小説『純情きらり』を観ていたのもあって、不思議なご縁を感じています。

岡崎のことも学芸員の業務のこと、まだまだ分からないことだらけですが、自分の目で見て、耳で聞いて、実際に歩きながら勉強していきたいと思っています。一日も早く一人前になれるよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



佐藤 卓也

四月の人事異動で美術博物館に配属されました佐藤卓也と申します。

入庁当時七年ほど、文化・芸術行政に従事しており、昔を懐かしく思い出しております。ちょうど、当館が完成した時期と重なっていたと思いますが、長い年月を経て配属されることとなりました。

少しか、略歴をお話しさせていただきます。これまでの中心は様々な事業に必要な用地を買収する業務、いわゆる不動産仲介業のようなお仕事です。その意味での知見は誰にも負けないと自負できるぐらいあります。大切な資産を譲っていたと、時には生活の拠点を市の都合である日突然移っていたと、そのための話し合いや必要な資産のあっせん、調整などに長くなが、従事してまいりました。話を戻します。私は学芸員ではありません。専門的な知見は持ち合わせておりません。それでも精一杯がんばっていただけらと思っていますのでどうぞよろしくお願いいたします。

エンドロールの流れる前に

最近よく、昔仕事でお世話になった方から、相談や依頼が舞い込んでくる。内容は様々であるが、そのいずれも心躍るもので、自分のような人間を覚えていてくれたことも相俟ってつい喜んで承ってしまう。

この集結してくる感じ、なんか既視感あるなど思ったら、RPGや冒険モノの漫画なんかで、これまで戦った敵や戦友が集結して、ラスボスに立ち向かうシーンだと気付いた。そりゃワクワクもする訳だと思つと同時に、ということはワシの学芸員人生、ラストが近いのか？と戦慄が走った。

その事実には若干落ち込みはするものの、何にせよラスボス戦は華々しくあるべきである。これまでに修得したひっさつわざやまほうを繰り広げてこのラスボス戦に挑んでいきたい。取り急ぎ今年度は、松平諸家に関する連続講座のスタートと、徳川四天王に関するシンポジウムを行えたらと思つている。展示も生誕五〇〇年を迎えるあの方に関して、他館と連携して開催できないか模索中である。そして順調にいけば、二〇二九年頃に集大成の展示を一つやりたいなと思つてはいる。

問題は、今の自分がラスボスに勝てるだけのレベルに達しているかどうかである。RPGなら数値が出るので一目瞭然である。しかし現実世界ではそうもいかない。色々とやってみて、けいけんちは貯まっていると思うが、適切なパラメータになっているかは甚だ心許ない（少なくとも、ちから・すばやさ・下がつている）。「もうダメなのか」となったとき、二度と会えないと思つた人気がキャラが颯爽と再登場する、そんなアツい展開を期待するしかないかもしれない。

とは言え、RPGだとラスボスを倒したあとに、裏ボスややりこみ要素が用意されているのはお約束。「もうちょっとだけ続くんじゃ」から倍以上続いた漫画もあるわけだし、もうちょっとだけこのシナリオを楽しませていただきたい。（湯谷）

学芸員を辞めるときの適切な比喩について

先日、サウナで顔見知りの常連客と話していると、美容師の人が美容師を辞めることを「鉋を置く」という比喩を使っていた。なるほど、そういう表現があるのか。ある職業を辞めること、距離を置くことに特化した比喩がある。力士を辞めることは「土俵を降りる」と言い、文筆家が執筆を辞め、小説家が創作を辞めることは「筆を置く」や「筆を折る」という。他にも役者は「舞台を降りる」し、サッカー選手は「ピッチを去る」。

学芸員を辞めること。これに文筆家が「筆を置く」というような適切な比喩はあるのか。今後自分にもいつかは訪れる「学芸員を辞めること」。これに際する適切な、そしてスマートで文学的な比喩があつてほしい。ここで学芸員を代表して「学芸員を辞めること」の公式な比喩を勝手に決めたいと思う。

まずオーソドックスに考えるならば、「舞台を降りる」と同じく、場を軸にした「展示室を去る」となるだろうか。ただ細かいことを言えば、展示室は作品資料と来場者のための場であるので、学芸員の居場所という点ではややズレが生じるように思う。「収蔵庫を去る」と言い換えた場合、学芸員は収蔵庫に入る権限はあるものの、常に収蔵庫の番をしているわけではないので違和感が残る。

視点を変えて「筆を置く」というような、マスターアイテムを軸にすることもできるかもしれない。僕の担当は近現代美術なので、絵画を扱うことが多い。絵画の展示でよく使うのは水平器である。となると「水平器を置く」となるだろう。ただ、これは客観的に見ると、ただ水平かどうかを測っている人になるし、「辞める」ことの比喩と捉えた場合、僕

は測量士や建設関係の仕事を辞めたことになりそうである。

学芸員にはそれぞれ担当分野と専門がある。となると、当館で刀剣を担当する安本は「刀を鞘に納める」となるが、それだと安本は武士だったことになる。巻物の端を押さえる時に使うガラス製の封算、このマイ封算を調査に携行する山下は「封算を置く」あるいは「封算を割る」となるのか。掛軸を扱うことが多い湯谷は、展示に使用する棒である「矢筈を置く」あるいは「矢筈を折る」となるのか。シュルレアリスム（超現実主義）の作品を担当する田中が「現実に戻る」と言つた場合、それは学芸員を辞めることよりも多層的な意味が生じる。

やはり共通項である「展示」を軸に考えることが正しそうだ。「展示台から降りる」「展示ケースから出る」は想像すると面白いが、先に述べたように作品資料と学芸員を混同している。学芸員が資料の輸送に同乗する美術品輸送専用車両というものがある。「美専車を降りる」は資料を取り扱う専門の輸送展示業者と共通する比喩と成り得るかもしれない。

字数が限られているので、諸々省略して、ここでは「学芸員を辞めること」の適切な比喩」についての公式見解として、最初に挙げた「展示室を去る」としたいと思う。展覧会の準備では誰よりも長い時間を過ごし、時には泣きそうになりながら何度も往来し、歓喜や安堵、あるいは怒号が飛び交う思い出に満ちた展示室。「展示室を去る」こそ、学芸員を辞めるという感慨深い決意表明の喩えとなると思う。因みに、いまのところ筆者に「展示室を去る」つもりはない。（今泉）

表紙画像：花鳥時絵螺鈿書簞節（岡崎市美術博物館蔵）

ARCADIA OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

【岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア】 第107号 2026年6月発行
編集・発行 岡崎市美術博物館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000（代表）

30TH ANNIVERSARY OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM

岡崎市美術博物館

開館時間

午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日

月曜日（祝日に該当する場合は、その翌日以後休日でない日）
年末年始

※展示替えのため臨時休館する事があります。

H P

<https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>

